学術部おすすめ！読んでおきたい特集記事

デンタルダイヤモンド／2015．8月号（中島副委員長 記）

○実践歯学ライブラリー：かかりつけ歯科医が行う小児期からの咬合治療
ー知っておくべき視点と注意点ー （石谷徳人）

＊地域におけるかかりつけ歯科医が責任ある咬合治療を行うことが出来れば。患者にとって幸せなことである。この頃、床矯正を選択する歯科医院が多いが、診査・分析・診断、特にセファロ分析は必要不可欠で、診断を行い、最も適した装置を選択するようにすべきであるとしている。症例として、乳歯列期の反対咬合と臼歯部交叉咬合、乳歯早期喪失、第一大臼歯の異所萌出、混合歯列期の叢生、混合歯列期の上顎前突、混合歯列期の反対咬合、などの対応を多く提示しています。興味深い内容です。

○Do”ベーシック“セミナー： 補綴歯を長持ちさせる形成・印象の基本手技（中野宏俊）

＊歯を削るということは、それが歯や歯周組織の「健康」や「延命」に繋がる場合に歯科医師に許される「治療行為」です。補綴物に合わせた適切な形成方法・歯肉縁下の形成方法・圧排糸の挿入方法・歯冠長延長術について記載しています。歯冠補綴を行う上で、是非知っておきたい内容です。

歯界展望／2015．8月号（小野委員長 記）

○成功に導くエンドのイニシャルトリートメント⑤根管形成
～抜髄根管を感染根管にしないための根管形成～（牛窪俊博）

＊岡山市歯科医師会でも講師にお迎えしたことのあるエンドの専門医である牛窪先生の連載です。今回は時間と経費の掛かる根管形成について、筆者が実際に行っている機材や方法を詳しく解説している。
①アクセスキャビティ：外形を歯牙ごとに図解している。また天蓋除去後の根管口の探索に使用する超音波チップの使用方法も解説している。
②ストレートラインアクセス：エンド三角の除去のイメージだ。①、②は行ったり来たりしながら完成するものと言っている。
③ネゴシエーション：３種類のファイル（Kファイル#８～15、中間サイズファイル、石灰化根管用ファイル）と潤滑剤（RCプレップ、グライド、ファイリースJ）の使用法を詳しく解説している。
④作業長決定：どこまで形成するか、ルートZXでの実際の使用法を述べている。
⑤根管形成：フルレングス形成をNiTiロータリーファイルを使用して行っている。手用ファイルを使う場合はNiTi製Kファイルを使用するそうだ。
⑥仕上げ形成：超音波チップを使用する。
いずれにしても抜去歯牙での練習は必須で、抜去歯牙でできないことが、口腔内では絶対にできないことを肝にめいじろ、と耳の痛いことも書いてある。ご一読ください。

ザ・クインテッセンス／2015．8月号（岡崎副委員長 記）

○特集3／接着、充填、メインテナンス…GPが知っておきたい
文献＆臨床でひも解くCR修復総まとめ（保坂啓一 高橋真広 中島正俊 田上順次）

＊欠損主体の時代から“口腔を生涯守る”時代へと変化を遂げている昨今、ミニマルインターベンション(MI)コンセプトの意義は増し、その大きな柱はコンポジットレジン(CR)修復である。適用範囲も小児矯正のリカバリー、矯正も補綴も拒否した患者への修復、コアからビルドアップしたモノブロック修復、両隣在歯への侵襲がないダイレクトブリッジ修復など広がっている。トピックスとして、ワンステップシステム使用時はエアーブローを徹底的に行い、溶媒を除去し、フロアブルライニング等との併用が必須であるなど。他、接着材料の性能を最大限発揮させるポイントやCR修復の長期経過とメインテナンス法についてもわかりやすく解説されている。

歯科評論／2015．8月号（居樹副委員長 記）

○特集／最近話題の矯正歯科治療法ー知っておきたいメリット・デメリット
（清水典佳 外木守雄 他）

＊矯正歯科治療はどんどん進化しています。いろいろな矯正装置や治療法が用いられていますが、それらのメリット、デメリットを把握していなくては効果的な治療はできません。歯科矯正用アンカースクリュー、機能的顎矯正装置、コルチコトミー、マウスピース型矯正装置についてどのような時に適用すべきか述べています。矯正治療を臨床に取り入れている先生は必見です。

○1つ上を目指す歯内療法へのアプローチ（Ⅳ）—抜髄（Initial Treatment）【臨床編】
14. Initial Treatment（特に抜髄処置）の成功率とそこから導かれる臨床のポイント
（石井 宏・清水花織）

＊抜髄（Initial Treatment）についての連載の最終回です。日常臨床で一般的に行われる抜髄（Initial Treatment）。みなさんは成功率をどのように捉えていますか。実は90%以上なのです。しかし実際臨床では感染根管治療が溢れています。それはなぜか？本連載のまとめと言える内容ですが、歯内療法について今一度考え直す必要を感じずにはいられません。
みなさんもお読みになって自分の臨床を振り返ってみてはいかがでしょうか。